幼年教育研究年報　第22巻
The Annual Reserch on Early Childhood, 2000, **22**,11-18

自己中心的言語概念とその批判を再考する

深田昭三[1]

Reconsideration of Piaget's Notion of Egocentric Speech and Its Critics

Shozo Fukada[1]

In his early work, Piaget emphasized the egocentric nature of preschooler's speech. Since 1970s, sociolinguists have pointed out the social features in children's speech and criticized Piaget's notion of egocentricity. This study contrasted the above two lines of research and disclosed the fundamental discrepancy between them. Piaget conceived sociality as an exchange of thought, whereas his critics interpret it as an exchange of speech turns. Piaget tried to find out distinctive features between children and adults, whereas his critics focused on common features to both. In the actual use of ego-centric speech, preschoolers often described their own behavior and this kind of speech permitted them to speak at considerable length without other's responding. It offers, concurrently, rich information about the speaker's thought to the listener, sometimes eliciting the partner's verbal response, and eventually allow them to carry out consequential exchanges of thought. In this sense, ego-centric speech is simultaneously ego-centric and socializing. Such equivocal linguistic characteristics may enable children to cooperate with peers in spite of their ego-centricity.

Key words: preschoolers, ego-centric speech, socialized speech, communication, language development

幼稚園に行き，にぎやかな子どもたちの声に聞き入ってみると，子どもたちの会話が，どう違うとは言いにくいものの，大人のそれとかなり異なっていると素朴に感じる。このような印象は，多くの大人たちが多かれ少なかれ共有するものではないだろうか。

1923年にPiagetの自己中心性言語の研究が発表され，大きな反響をもたらした(Piaget, 1959)[2]。子どもの発話が自己中心的であるという彼の指摘は，子どもの発話が大人のそれとは違うという私たちの素朴な直感によく合うし，その直感を「科学的に」解明してくれたと受け止められたから大きな反響をもたらしたのであろう。

しかしながら，素朴な直感をひとたび離れて言語研究に目を転じてみると，このPiagetの自己中心性言語に関する研究はひどく評判がよくない。これはVygotsky以来，Piaget理論が多くの批判にさらされてきたことと，それに加えてPiaget自身も，発生的認識論の枠組みの中で，言語的な自己中心性の研究から離れて，知的自己中心性にその重点を置くようになってしまったからなのであろう。

そのためPiaget以後の言語研究の展開では，幼児期における会話がいかに社会性に富んだものであり，Piagetの言う自己中心性からは大きくかけ離れているという見解が支配的になった。しかしこれらの研究が，幼児期の発話を聞いて感じる違和感をPiaget以上によりよく説明しているとは思えない。どちらかというと，大人の発話と子どもの発話の違いが研究の進展に従って見えなくなってきたとも言えよう。

Piagetのテキストを再読してみると，Piagetが意図したことと，その後の批判とはすれ違っていることも少なくないことに気づく。本稿では，Piagetの自己中心性概念に立ち戻り，その後の批判とを対照させ，

1　広島大学教育学部附属幼年教育研究施設講師
2　Piagetのこの本は，第1版から第3版にかけて内容が追加されている。フランス語からの翻訳には，第3版に基づく日本語訳（大友茂訳，1968）と英訳がある。この日本語訳にはやや読みづらい点があったので，本稿で引用する場合には，第3版の英訳をもとに翻訳しなおしたものを用いた。

両者の間で何がすれ違っていたのかを問いなおすことによって，幼児期の言語的相互作用研究における新たな展望を見出していきたい。

Piagetの自己中心性言語研究

まずはじめに，Piagetの著作を手がかりに，彼の著名な自己中心性言語概念を再確認してみることにしよう。Piagetはルソオ研究所附属幼稚舎の二人の男児，PieとLevの自由遊び場面での発話を収集し，これを分析した。本文中に引用されているPieの発話例を，次のサンプル１に示した。

サンプル１．6歳半のPieの発話（Piaget, 1959, pp.6-7)

23 Pie(客車のつながったの電車を描いているEzに)：でも後につながっている電車に旗がついてないよ(答なし)[適応的報告]
24 （自分の電車について）この電車には客車がつながってないんだ…（Pieは特に誰にも話しかけていないし，誰もPieに答えない)[独語]
25 （Beaに）客車のつながってない電車なんだ（答なし)[集合的独語]
26 (Heiに)この電車には客車がつながってないんだ，Hei，見て，赤くないんだ，分かる…（答なし)[集合的独語]
27 （Levが大声で，そしてPieにも誰にも話しかけるわけではなく，向こうから「変な男」が来ると言う。）Pie：変な男！（自分の電車を描き続ける)[反復]
28 電車は白いまま残しとこう。
29 （横で絵を描いているEzが「僕は黄色にしよう」という)，だめ，全部黄色にしちゃだめ。
30 階段を描くよ，見て。(Beaは「今日の午後は行けないの，リトミックの勉強があるんだ」と答える)[集合的独語]
31 何て言った？(Beaは同じことを繰返す)[集合的独語]
32 何て言った？（Beaは答えない，Beaは自分が言ったことを忘れて，Roを押す)[集合的独語]
33 （Beaに）Roはほっとけよ[命令・要求・威嚇]
34 （B先生はEzに一緒に行きたいのかどうか聞く)，Ezここに来て，まだできてないよ。(34の続き）先生，Ezはまだ終わってないんです。[適応的報告]
35 （誰にも話しかけず）黒い石を描くぞ…[独語]
36 （同じように）きれいだ…この石は
37 （Ezに）Ezのよりいいだろ，な？（答えなし。Ezは前の発言を聞いていない)[批判と嘲笑]

注：[　]内には，Piaget(1959)の本文中で言及されているカテゴリー区分を示した。

Piagetは，このPieとLevの発話を，自己中心的言語の３つのカテゴリー（反復，独語，集合的独語）と社会性言語の５つのカテゴリー（適応的報告，批判，命令・要求・威嚇，質問，応答）に分けた。このPiagetの用いたカテゴリーで特徴的なのは，相手に自分の考えを伝える（あるいは伝えるように見える）発話を集合的独話と適応的報告に区別し，前者を自己中心的発話の，後者を社会性言語の代表例としたことである。この集合的独話は，「外部の人は，常にそのときの行為や思考と結びつけられるが，しかし注意されることも理解されることも期待されていない。他者の視点は，考慮に入れられることは無く，他者の存在は刺激としてのみ役立つ」(Piaget, 1959, p.9)ような発話として定義される。一方，適応的報告は，「聞き手に興味を持たせたい何かや，聞き手の行動に影響を与えたい何かを聞き手に告げることによって，あるいは議論や，共通目的追求のための協同において考えを現実に交換することによって，自己の思考を他者と実際に交換すること」(Piaget, 1959, p.10)であるとされる。

応答を除くすべての発話のうち自己中心性言語の占める割合を自己中心性係数として算出した結果，Pieの場合0.43，Levの場合0.47というかなり高い割合であった。この結果から，Piagetの有名な自己中心性概念が抽出され，子どもの思考は大人とは異なった自己中心的思考であることが結論された。

Piagetの自己中心的言語に対する批判

1970年代から主として社会言語学的，あるいは発達社会言語学の立場から，子どもの発話は，Piagetの言うような自己中心的なものではないのではないかという批判がなされた。

まず，子どもの発話が全般的に社会的であるという指摘がなされた。たとえばMueller(1972)は，3歳半から5歳半の互いに見知らぬ子ども同士の発話において，62%が反応を得ており，23%は返事はしないものの発話者に視覚的注意を向けており，15%だけが，反応を引きださないことを見出した。Garvey & Hogan (1973)も，3歳半から5歳半の互いに顔見知りの子ど

Table 1 コミュニケーション意図と自己中心性

		コミュニケーション意図	
		なし	あり
自己中心性	あり	完全な独語	集合的独語，反復，初期の質問・要求
	なし	?	社会性言語

も同士の発話を観察し，話し手の発話に聞き手が適切な答えを返したり行動を行うケース（発話の後で相手が返事をする場合など），あるいは発話が相手の発話に応答するケース（前の相手の発話に返事をする場合など）を合計すると，発話全体の59％を占めていた[3]。Mueller(1972)では，聞き手側の応答を得るために，話し手側が，たとえば相手を見たり，聞き手の興味のあることを話したり，呼びかけなどの注意をひきつける技術を用いていることを，Garvey& Hogan(1973)では，呼び出し－返答ルーチン(summons-answer routine)を使用していることを明らかにした。

Piagetが自己中心的発話に分類した発話が，社会性を持つとの指摘も行われてきた。たとえばKeenan (1974)は，2歳9ヶ月の双子の発話を観察し，Piagetが自己中心性言語に分類した繰返しが，社会的機能を有していることを指摘した。つまり「繰り返し」は，自分の発話を繰り返すことで他者からの承認を引き出すし，先行する他者の発話を繰り返すことで先行発話への承認を表現するのである。またDorval(1990)は，5歳児の集合的独語の印象的な例を引きながら，彼の発話や行動が独語的でありながら，同時に他者に意思を伝達し，社会的なやりとりを行いうるのかを逸話的に示している。

自己中心性言語批判は批判足り得たか

上記のようにPiagetの自己中心性言語概念は，徹底的に批判されてきた。彼らの批判は，子どもの発話が社会性を持たない発話なのかどうか，つまり「注意されることも理解されることも期待されていない」発話だったのかどうかという点に集中していた。これはつまるところ発話者側の期待の問題であり，言いかえれば，発話者が発話する時点で，コミュニケーションし，相手に意志を伝達する「意図」を持つのか否かという問題である。コミュニケーション意図を持つならば社会的であると言えるし，コミュニケーション意図を持たないのならば自己中心的と言えるはずである。

Mueller(1972)やGarvey & Hogan(1973)の指摘するように，全般的に子どもは相互的な言語的なやりとりを行っており，これはコミュニケーション意図の存在を示していると言ってよいだろう。またPiagetが自己中心的言語に分類した「反復」(Keenan, 1974)と「集合的独語」(Dorval, 1990)のいずれにおいても，コミュニケーション意図を持つ場合がありうるというが明らかにされた。このことは，Piagetが自己中心性言語と呼んできた発話が社会性を持つものであり，従って自己中心的とは言えず，それゆえ自己中心性言語の存在そのものも否定されたはずであった。しかし，それは正しかったのであろうか。

Keenanの主張した反復にしても，それが聞き手にとって識別可能であるとは言え，聞き手にとって最適に調整されているとは言えない。このことは，やはり子どもの発話には自己中心的な部分が残っていることが否定しえないことを示している。Piagetの自己中心性言語の定義に従って批判を行い，それがいかに社会性を持つものかを立証し，完璧に批判し尽くしたにも関わらず，子どもたちの発話がなおかつ自己中心的であるというパラドックスがここに生じるのである。

視点を変えて，Piaget自身によっても社会性言語に分類されている質問・要求についてみてみよう。これらの発話は集合的独語よりも早く出現し，しかも多くの場合明確なコミュニケーション意図を有しているはずである。この点ではPiagetと同様に，質問や要求を社会性言語に分類することに，ほとんどの人は異議がないであろう。しかしながら，幼い時期の質問や要求が必ずしも聞き手にとって分かりやすいもの

3 Piagetの提示した自己中心性係数は，社会性言語のうち応答を除いて計算したものであり，これを社会性言語に入れ直して，全発話のうち社会性言語の占める割合を計算しなおすと，社会性言語の比率がPieで63％，Levで61％になる。この比率はMueller(1972)が報告した，相手からの反応を得る比率62％や，Garvey& Hogan(1973)が報告した59％という比率とほぼ等しくなる。つまり，ほぼ同様の発話に対して比較的似た分析をし，同じような数値を得ながら，全く正反対の結論を引き出したとも言えよう。

とは限らない。つまり，これらの発話がコミュニケーション意図においては社会的であっても，他者の視点に対して調整されてはいないという面では自己中心的でありうるのである。

このことを図示してみよう。Table 1のとおり，Piagetによって自己中心性言語に分類されていた発話は，コミュニケーション意図を持つ場合も持たない場合もあり，また社会性言語に分類されていた発話は，自己中心性を持つ場合も持たない場合もありうる。つまり皮肉にも，Piagetの社会性言語／自己中心性言語という区分は，社会性の有無（コミュニケーション意図の有無）にも，自己中心性の有無にも，どちらにもぴったりとは該当しないのである。

Piagetの自己中心性概念定義における混乱

この混乱を生じるもとは何だったのか。もう一度，Piagetの定義を振りかえってみよう。彼の定義によると集合的独話は，「注意されることも理解されることも期待されていない」し（これはコミュニケーション意図が欠如していることを述べている），「他者の視点は，考慮に入れられることは無」い（これは自己中心的であることを述べている）。これらの二重の要素が定義に混入していることが問題の根源だったのである。この定義は，コミュニケーション意図を持たない発話は自己中心的であり，また自己中心的な発話はコミュニケーション意図を持たないことが自明であることを前提にしている。しかし先に述べたように，このことは自明ではないし，コミュニケーション意図を持つ自己中心的な発話というものが存在しうる。そのため，集合的独語がコミュニケーション意図の欠如という前者の定義に反していることを立証すれば，Piagetの集合的独語概念は崩壊するはずなのであるが，かといってもう一方の定義にある自己中心性によっては崩壊しないというパラドックスが生じるのである。

一方，適応的報告は，「自己の思考を他者と実際に交換すること」であるとされる。Piagetにとっては集合的独語と適応的報告とは背反的な発話であり，それゆえ一方の定義において当てはまるものは，他方には当てはまらないように定義されていなければならないはずである。にも関わらず，ここでまた集合的独話の定義には現れなかった「思想の交換」という，さらに異なった要素によって定義が行われる。つまり，コミュニケーション意図を持ち，脱中心化しているだけでは適応的報告とは呼ばれない。そこで「思想の交換」が行われていたのかどうかが，判定の基準になるのである。

この「思想の交換」という側面から，これまで述べてきた集合的独話／適応的報告の区別を振り返ってみると，両者の区別は明瞭になるように思われる。つまり，「思想の交換が行える」発話が適応的報告であり，コミュニケーション意図が欠如していたり，自己中心的であったりするために，「思想の交換が十分には行われていない」発話が集合的独話として認定されていたのではないか。事実，Piaget自身も思想の交換が行われていないことを集合的独話の判定にしばしば用いている。

ここから考えると，コミュニケーション意図の不在とか，自己中心性の存在は，思想の交換が行われていないことの「原因」の一つとしておかれるべきものであろう。つまり，あるときにはコミュニケーション意図がないために思想の交換が行われないし，あるときには，自己中心性が存在するがゆえに，思想の交換が行われない等など。Piagetは，この原因と定義とを混同したことで，定義の二重性を生み，その後の混乱をも引き起こしたとも言えよう。

Piagetにおける社会性の意味

このように，Piagetのいう社会性は，他者と思想を交換するという意味での社会性であり，単に社会的に相手に何らかの効果を及ぼす発話であるということ以上の意味を含むものであった。つまり，Piagetの批判者が想定した発話交換レベルにおける社会性と，Piagetが言わんとしていた思想交換レベルにおける社会性とでは，そもそも議論していた中身が異なっていたのである。

これまでの論議は主としてPiagetの本の第1章を元にしたものであった（これまでのPiaget批判も主としてこの第1章をターゲットにしたものであった）が，このPiagetの社会性概念をさらに追求するために，Piagetの本をさらに読み進んで行こう。第2章[4]では，Piagetのいうところの社会性を持つ会話には，発達段階があることが述べられ，Table 2のような発達段階が提出される。

この発達段階から，Piagetが発達段階の究極において考えていたのは，会話を通しての共同と論争であ

4　章番号が大友(1968)の日本語訳と英訳とでは異なっている。ここでの章番号は，第3版の英訳に従った。なお英訳の第2章は，日本語訳の第3章に当たる。

Table 2　社会的発話の発達段階(Piaget,1959)

独語	会話		
段階I	段階IIA （第１タイプ） 聞き手は話し手の行為や思考と結びつけられる （共同なしに）	段階IIA （第２タイプ） 行為あるいは非抽象的思考における共同	段階IIIA 抽象的思考における共同
集合的独語	段階IIA （第１タイプ） いざこざ （対立行為の衝突）	段階IIA （第２タイプ） 原初的な議論 （正当化されない主張の衝突）	段階IIIA 純粋な議論 （正当化された主張の衝突）

ることが分かる。この会話を通しての共同と論争というモデルは，うがった見方をすれば，一種の科学者のコミュニケーションモデルに近いものかもしれない。つまり，お互いに思想を伝え合ったり，正当な理由を付した議論を行うことによって互いに進歩していくというモデルである。科学者モデルとまでは限定しなくても，少なくとも彼の属していた文化における価値基準に沿って，最終的な到達点が示されていることは確かであろう。逆に言えば，Piagetの発達モデルは，一種の文化への参入モデルとしてとらえてもよいかもしれない。

ともあれPiagetは，一方の極に「集合的独話」を置き，もう一方の極に「真の共同と論争」を置き，両者からの「距離」によって子どもの発話の社会化の程度を推定した。後者の極がPiaget自らが属している文化基準だと考えれば，自分からの距離によって子どもの発話の社会化の程度を推し量ったと言い直してもよいかもしれない。二つの対極を形成する「真の共同と論争」と「集合的独話」は，それゆえに，性格づけにおいても対極の特徴を付与されなければならなかった。Piagetが集合的独話に付与した性格とは，互いに会話を交わしているように見えて，実はコミュニケーション意図も無く，他者の視点も考慮に入れられない，それゆえ協調も対立もないという性格であった。このような集合的独話に対する性格づけが誤っていたことは，先に見た多くの研究によって実証されている。Piagetの付与した性格づけは，ある意味では彼の発達理論の要請によって，より極端な方向にゆがめられてしまったとも考えられよう。

このように，Piagetは大人（Piagetの価値基準に達した大人との限定がつくが）の会話と，子どもの会話との差異に着目し，その差異によって子どもの思考の特質（自己中心性）を導き出した。一方，Piagetの批判者は，大人の会話と子どもの会話の差異よりもその同質性に着目し，これによっていかに子どもが社会的な存在であるかということを主張し，自己中心性を批判した。子どもの会話という同じ素材を分析しながら，PiagetとPiagetの批判者との間で，かくも結論が異なったのは，先に述べた社会性のとらえ方の差異に加えて，大人と子どもとの「差異と同質性」のいずれに注目するのかが異なったためではないだろうか。注２でも指摘したように，Piagetのデータと Mueller(1972)やGarvey & Hogan(1973)のデータには実質的にはほとんど差は無く，しかしそこから全く正反対の結論を引き出したのも，この差異と同質性のいずれに注目するのかというアプローチの違いがあったためではないか。

行動記述発話

以上まとめてみると，Piagetの批判者たちは，Piagetを徹底的に批判したように見えて，実はそうではなかった。確かにPiagetが自己中心性言語の特質としてあげた，コミュニケーション意図の不在については，批判されてきたようにやや誇張された認識があったといえよう。しかし両者の根本的な違いは，社会性のとらえ方の違いであり，異質性と同質性のいずれに注目するかというアプローチの違いであった。このような研究の方向性の違いを超えて，そもそもPiagetが集合的発話と認定した発話がどんなものであったのか。このことを確かめるために，もう一度発話そのものに帰って検討してみよう。

サンプル２は，二人の４歳女児同士の会話である。砂箱におもちゃを置きながらＡ子はさかんに発話しているが，Ｂ子はほとんど返答を返していない。返答を返さないというよりは，Ａ子が矢継ぎ早に発話するので，ほとんど割りこむすきがないのである。また，発話２の「いす：おこうよ。」も相手の発話が行えるだけの時間的余裕を置かずに次の発話が行われ

る。発話8，13，21に見られるように，ときどきB子が割り込んで反応を返すが，A子はほとんどそれに対応した返答を返さない。これらのA子の発話は，Piagetが独語あるいは集合的独語として認定した，典型的な発話である。この種の発話は，3・4歳児の発話データでは珍しくない。これらの発話では，自己の行動を記述するのが特徴である。Kohlberg, Yaeger & Hjertholm(1968)も，この時期の自己中心性言語を分類して，5-6歳ごろには，この自己の行動を記述する発話が，自己指導的な発話と並んで多いが，8-9歳ごろにはほぼ消滅することを見出している。ここでは，これらの発話を仮に行動記述発話と呼ぶことにしよう。

サンプル2．箱庭を囲む二人の4歳女児の会話

1 A:いす，ね。
2 A:ここに，いす：おこうよ。
3 A:ここにベッド。
4 A:ここにおだいどころ。
5 A:あくぞ：：，こわい：：。
6 A:よし，こうやっておいて。
7 A:おうちもここ。
8 B:みえないよ，おうち。
9 A:えっと，ここ，ここで，ここにいすにたつ。
10 A:ウィンナーをのせる。
11 A:ウィンナーが，落ちた。
12 A:かくして。
13 B:なに，かくすん？
14 A:ウィンナーかくして。
15 A:ハムをかくす。
16 A:いすをおく。
17 B:か：いじゅうがでる。
18 A:かばの，かばがでる。
19 A:かばのかあさんがでる。
20 A:ひつじがでる。
21 B:やぎよ。
22 A:木をおいて，木を置く。

このような行動記述発話は，なぜ発話されるのであろうか。Piagetが行った説明，つまり自己中心的だからこのような発話を子どもがするのだというのは実は説明になっていない。なぜなら，自己中心性はこれらの発話が相手の視点を考慮しないという点から引き出された概念であり，自己中心性があるからこのような発話になるのだと主張すれば，同語反復になるからである。ある種の発話をするからには，それなりの動機があり，それが子どもにとって何らかの利益をもたらしているはずである。それは何なのか。

本稿で確実な答えを出すことは難しいが，次のようなことが考えられるのではないか。まず第1に，これらの行動記述的な発話は，いま・ここで起きていることを言語化するものであり，子どもにとっての認知的な負担は小さいことが挙げられる。聞き手を想定して聞き手にとって何らかの利益になる発話をしようとすれば，多くの認知的負荷がかかる。たとえば，聞き手に何が興味があることを探らなければならないし，相手が知らない新規な情報が何であるのかの予期も行わなければならない。しかし，自己の行動を記述するだけであれば認知的な負担は少ないし，仮に話し続けることが，子どもたちにとって魅力的なことであるとすれば，自己の行動を記述することは，大変有効な方略と言えよう。

また第2に，仮に相手に向けた発話でなくても，行動記述すること自体が，相手に対する情報提供になっていることが挙げられよう。サンプル2の8，13，21のBの発話は直前のAの発話を受けて発話されたものであり，Aの情報提供がなければ発話されることはなかったはずである。さらに，同じ女児のペアがサンプル2の後に話したサンプル3の会話を見てみよう。56の発話は，サンプル2で見られたのと同じ行動記述発話である。しかし，この場合は，二人の間で比較的長いターンの交換が引き出されている。発話68，73-74では，自己の行動の予告を行い，相手からの反応が返ってくることで，やはり長めのターン交換も行われる。

サンプル3．箱庭を囲む二人の4歳女児の会話（続き）

56 B:ハムもみっけた。
57 A:ハムもね，かくすんよ。
58 B:そうよ。
59 A:かくすんよね，たべちゃいけんけんね：
60 B:うん。
61 A:みかんも。
62 B:オレンジでしょうがあんたは。
63 A:えっ？
64 B:あんたは。
65 A:ん？
66 B:きいてんの。
67 A:きいているよ(リズムに合わせて)。
68 A:トマトはこのこにあげよう。
69 B:なんで：あげる：の？
70 A:でも，ね：かわいそうだから。

71 B:このかいじゅうもあげよ。
72 A:ふっ，やさしいね。
73 B:でももう　もういっこをかくそう。
74 B:はやく，(　　)かくさなくちゃ。
75 A:たべものをね。
76 B:はむも。
77 A:はむ。
78 B:うめも。
79 A:はい，かくさな//
80 B:これも。
81 B:これも。
82 A:こ：れも//
83 B:いっしょに(　　)。
84 B:これも，これも。

このように行動記述発話は，自己の行動を記述するという大変簡便な方法で，ともかくも話しをすることができるし，自己の行動を記述することで相手側に話のきっかけを与え，発話交換を引き出すこともある。話のきっかけを作る，つまり相手が興味を持って話しを継ぐことができるようなトピックを提示するという大人でもなかなか大変な作業を，行動記述するという単純は方法で行っているといってもよいかもしれない。

ここで注意したいのは，この行動記述発話には反応が返っても返らなくても構わないということである。サンプル２のＡの発話は相手からの反応が返らないことを全く気にしていないし，それどころかＢの反応が返ってきてもほとんど無視している。サンプル３の発話56, 68, 73-74は相手からの発話が返り，長めの発話交換が行われるが，もし相手からの反応が返らなかったとしても，別に支障があるわけではないであろう。

これを大人の持つコミュニケーション意図という面からみると，多少奇妙な発話であるとも言える。コミュニケーション意図があるのなら，反応が返ってこないことは伝達の失敗にあたり，発話の意図が通じるまで繰り返し努力をする必要がある。しかし，この行動記述発話は言いっぱなしであり，このような努力はしない。反対にコミュニケーション意図がないとすれば，反応が返ってくることに，発話者自体が驚くはずである。たとえば大人が独り言を言っているのを他人に聞かれた場合には，聞かれたことに驚き，恥じらいの感情がわくであろう。しかしこの行動記述発話に反応が返ってきても，それを無視するにしろ，さらに話を展開するにしろ，予期しない反応が返ってきたという驚きの感情はみられない。つまり，行動記述発話では，子どもは自分の話している内容が伝わらなくてはならないとも考えていないし，伝わってはいけないとも考えていないのであろう。

聞き手主導による思想の交換

再びPiagetのテキストに戻ってみよう。集合的独語に言及して，「彼は自分の言うことを誰かが耳を傾けているかどうかほとんど気にかけないし（中略），さらに自分が話しかけた人が本当に聞いたのかどうかも気にかけない」(Piaget, 1959, p.8)「Pieは同じ意見を二人の子どもに言い，自分の言ったことが，どちらの子にも聞かれてもおらず返事もされないのに，全く驚くこともない」(Piaget, 1959, p.18) と述べている。ここには，子どもの発話に対する，Piagetの感じた素朴な違和感が感じられる。しかし，言葉を足せば，先に見たように，仮に自己の発話に相手が答えたとしても子どもたちは驚きはしないし，そこから発話の交換が起きることもある。

Piagetは，独語や集合的独語をコミュニケーション意図のない発話とみなしたし，Piagetの批判者は，明瞭なコミュニケーション意図が認められる発話が多く存在することを指摘した。しかし，先に述べた行動記述言語についての考察によれば，そもそも明瞭なコミュニケーション意図という概念が子どもたちの中に確固として存在しているものなのかどうかを，まずは疑うべきなのではないだろうか。行動記述発話は，発話者がはっきりとした意図を持って自己の発話を相手に伝えようとするような発話ではなく，さりとて聞いては困ると明確に意図している発話でもない。

このような場合，Piagetが社会的か否かの分岐点と考えた，思考の交換は行われうるのであろうか。確かに，発話者の伝達意図が不鮮明である点からも，Piagetが社会的発話の到達点とした真の共同と論争のレベルに達していないことは明らかであろう。しかし，サンプル３に見られるように，行動記述発話をきっかけにして，互いの発話を交換が始まり，最終的に子どもたちは互いの行動における合意に達している。このことは，「結果的に」互いの思考（この場合は，次に何をするのか）を交換していると言ってもよいのであろう。ここでも，聞き手側が異議を申し立てたり，同意を行ったりするのは義務的ではなく偶発的でありながら，その偶発性を利用しながら思考の交換を行っていると考えてもよいのではないか。

大人の会話から考えると，相手に自分の思考を伝

えるためには，「話し手」が，相手の現在の思考の状態を推定し，相手の思考に即して自己の発話を調整しないと，相手は充分理解できないし，思想の交換も不可能であると思える。このような話し手が自己の思考の内容を意図的に伝えようとする「話し手主導の思考の交換」は，幼児期の子どもたちにとって，不可能ではないにせよかなり難しい。しかし，このような自己中心的を残しつつもPiagetの言う意味での社会性，つまり思想の交換ができるという離れ業が可能になるのは，前に述べたように，話し手は自分が行っていること，行おうとしていることを次々と言語化し，場合によっては「聞き手」が同意や異議を行うというスタイルをとるからであろう。聞き手が同意を与えたいとき，異議を申し立てたいときに発話の交換が行われるのであるから，どのような思考の交換が行われるのかは，話し手自身は決定できない。そして，必要に応じて「結果的に」思考の交換が行われるのである。これは，いわば「聞き手主導型の発話交換」であるとも言えよう。

子どもの会話に対して感じられたであろうPiagetの違和感は，確かに我々も共有できる。しかしそれは，単に子どもたちの会話が自己中心性によって彩られているからだけではなく，「聞き手主導型」という我々大人とは異なった会話形式のためであったのかもしれない。

引用文献

Dorval, B. (1990). A dialogized version of Piaget's theory of egocentric speech. Dorval, B. (Ed.) *Conversational Organization and its Development. Advances in Discourse Processes Volume XXXVIII*. Norwood, New Jersey: Ablex Publishuing Corp. pp.131-164.

Garvey, C., & Hogan, R. (1973). Social speech and social interaction: Egocentrism revised. *Child Development*, **44**, 562-568.

Keenan, E.O. (1974). Conversational Competence in Children. *Journal of Child Language*, **1**, 163-183.

Kohlberg, L., Yaeger, J., & Hjertholm, E. (1968). Private speech: Four studies and a review of theories. Child Development, **39**, 691-736.

Mueller, E. (1972). The maintenance of verbal exchanges between young children. *Child Development*, **43**, 930-938.

Piaget, J. (1959). *The language and thought of the child (3rd ed.)*. London: Routlege & Kegan Paul.（大友茂訳 (1968). 臨床児童心理学 I 児童の自己中心性．同文書院)

APPENDIX

サンプル２および３で用いられた記号の意味

（　）	発話のききとれない部分を示す
？	疑問を表す上昇音調を示す
：	音の引き伸ばしを示す
//	次の発話が間をおかずに発話されたことを示す